

琵琶湖におけるブルーギル(*Lepomis macrochirus*)およびオオクチバス(*Micropterus salmoides*)の食性

関 慎介

◆背景・目的

琵琶湖に生息するブルーギル等の外来魚の異常繁殖が、琵琶湖に生息する在来魚介類に大きな影響を与えている。そこで、食性の面から琵琶湖における外来魚の影響を把握するために、南湖および北湖においてブルーギルおよびオオクチバスの胃内容物調査を行った。

◆成果の内容・特徴

- ブルーギル(70 ~ 90mm)およびオオクチバス(100 ~ 150mm)の胃内容物組成を図に示す。
- 南湖(大津市におの浜)でのブルーギルの胃内容物組成は、4月~10月にかけて植物の割合が大きい。冬期にはその割合は低下した。一方で、貝類とユスリカ幼生の割合が冬期に上昇した。オオクチバス(守山市木浜町)の胃内容物は、魚類とエビ類が大部分を占めていた。
- 北湖(西浅井町大浦)のブルーギルの胃内容物組成は、冬期にかけて植物の割合が上昇した。また6月~7月にかけて昆虫の割合が上昇した。オオクチバスの胃内容物は、南湖と同様に魚類とエビ類が大部分を占めていた。

◆成果の活用・留意点

- ブルーギルは、各時期や各場所に応じた食性を示すと考えられる。また、多くの割合を占める植物以外にも貝類や動物プランクトンを捕食する強い雑食性を示すことから、在来魚種との餌の競合を巡る影響が懸念される。
- オオクチバスは、強い肉食性を示しており、在来魚種への直接的な食害の影響が懸念される。

